

【生活科】教科提案

五感を通して、感じ、表現する生活科学習 ——「ほんまもん」の活動を通して、認識力の土台を育みながら——

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

生活科のねらいは、意欲的に取り組む活動や体験を積むことで、「自立への基礎を養う」ことである。では「自立への基礎」とは何なのかを、低学年の発達課題とのかかわりで考えると、幼児期から学童期への移行期であり、およそ、次のような発達課題がある。

- ①言語能力の発達…「話しことば」から「書きことば」への移行。体験したことを言語化することで認識力を養う。
- ②社会性の発達…自己中心性から集団意識へ、自分と他人の区別。コミュニケーション力。
- ③認識の発達……社会・自然の認識、時間空間の連続性・系列性の獲得、数量・形の認識。
- ④感情の発達……相手の反応や、対象との関わりを通じた感受性、意欲の形成。
- ⑤身体能力の発達…手指の巧緻性、調整力（柔軟性、平衡感覚、反射能力など）の形成。

生活科は、子どもの生活の全てを学習対象とし、発達課題にせまっていく教科である。

①については、感じたことを絵や文字、ことばで表現することで、②については、「友だち」「小学校のお兄さんお姉さん」など、「身近なひと」とかがわる学習を通して、③については、生き物とかがわり、季節を感じる学習で「自然認識の土台作り」を、いろいろなひと、身近な地域、生産活動、仕事（労働）をすること、かけがえのない自分について、昔や世界の学習などを通して、④については、集団で学習すること、子どもにとって魅力のある教材開発をする（学習対象の設定）ことを通して、⑤については、生活で使う道具、おもちゃなどの工作や遊びを通して、応えていきたい。

生活科は、子どもの生活全てが学習対象の教科であり、子どもは対象を「見る・聞く・嗅ぐ・触れる・食べる」といった五感全てを通し、「感動」を伴って感じることで、対象へのかかわりを深め、そういった過程を通して、認識力を育てていく。また、感じ方は子どもによってちがうため、五感を通して感じたことを、一人ひとりが様々な表現を駆使して、伝え合うことで、それぞれの受け止め方を交流し合い、「あ、それもあったな。」という新たな気づきや、「そういう見方もあるのか」という視点の広がり、自分の考えをふり返り、再確認したり、修正したりすることで、自分の学習対象へのかかわりを深めていき、認識力を高めていくことができるようになる。

また、友だちの表現を参考に、自分の表現を広げることも期待される。

(2) めざす子ども像

①自分を大切にできる子

生活科では、「自分自身への気づき」が大切にされている。たった1人のかけがえのない

自分の自覚は、かけがえのない他者認識につながる。「自分自身への気づき」は他者とのかわりの中でこそ、捉えられるものであり、自分の生活や友だちの生活を事実としてリアルにつかむことが、大切である。自分のがんばりが成果につながる体験や、友だちとの協力での達成感を多く味わわせたい。

②友だち（他者）を大切にできる子

社会の中で生きる「自立への基礎」の土台の力は、もっとも小集団である自分と友だちとの関係の中で育つ。人権意識の土台となる力を育てるために、友だちをよく知る活動や、相手のことを考えて、交流し合う活動を通して、コミュニケーション力を育て、友だちのよさに気づき、豊かな人間認識を育てたい。

③自然にはたらきかけ、個別的な事実認識ができる子

日本人の成人の科学的な認識力は、先進国の中でも最低レベルである。参考までに、IEA（国際教育到達度評価学会）が行った「国際数学・理科教育調査（中学生対象）」によると、理科では、第1回の1970年（18の国/地域対象）は1位だったのが、第4回の1999年（TIMSS-R）（38の国/地域対象）では、4位となった。しかし、問題なのは意識であり、理科を「大好き・好き」と答えたのは、99年度で55%、95年度で56%と、国際平均値の79%よりも23%も低い（95年度比較）、これは、参加23カ国中22位である。

では、成人はどうかというともっとひどい。経済協力開発機構OECDが、加盟14カ国の成人を対象に、科学に対する興味・関心を調査している。項目は、「新しい科学上の発見」「新技術の開発や工夫」「医学上の新発見や知見」「環境汚染問題」のそれぞれに非常に関心がある、まあまあ関心がある、ほとんど関心がないに分けて集計されている。日本は、4つの話題全てにおいて、14カ国中最下位である。さらに、OECDでは、いくつかの調査内容の中で「市民の科学リテラシー」も調査している。こちらは、1位のデンマークは50%、日本は17%で14カ国中13位である。

生活科で、低学年の発達課題に応じた自然へのはたらきかけを多く取り入れ、自然の本質的なとらえ方の土台を養いたい。

自然や物を見つめ、さぐる活動、はたらきかける活動、自然を表現したり、発表したりする活動を通して、自然のもつ論理性をとらえたり、興味や知識、感じ方を共有化し、自然へのはたらきかけ方を広げたい。

また、モノを作る活動を通して、工夫して物や自然にかかわる力や、見通しを持って物事を進める力を育てたい。

④社会に生きる自分を意識し、社会への関心をもつ子

家族の中の自分の役割、身近な社会（人や仕事）、自分にできる仕事、さまざまな国に生きる多様な人々の生活を知り、世界への目を広げる活動を通して、社会・地球への関心を育てたい。

人の生活スタイルやものの考え方、価値観は、けして同じではない。それらの相違を除外

するのではなく受容できる態度を養うことは大切である。異なるものに対し、関心を持ったり、理解したり、受け入れたりすることで、自己を確立していくことが求められている。また、社会という集団の中で存在している自分を認識し、社会に関心を持てるようにしなければならない。

以上の土台を形成するために、家族の中の自分の役割、身近な社会（人や仕事）、様々な国々の文化や言葉を直接体験させていきたい。

⑤さまざまな表現方法に親しみ、自己表現力を発揮できる子

「書きことば」の獲得のみならず、絵や、げき、お話、外国語など、表現力を豊かにし、コミュニケーション力を育てることで、伝える喜び、分かりあう喜びを実感させたい。携帯電話のメールでコミュニケーションを取ったり、パソコンのチャットや掲示板を利用して、誰ともわからぬ者とコミュニケーションを楽しむ人が増えてきている。それらとは、対照的に顔と顔を合わせて意思疎通をはかる時間が、ますます減ってきている。

子どもたちが、大人になる頃には、さらに、想像もしなかったコミュニケーションの取り方が現れるに違いない。

このような高度情報化社会の中で、子どもたちが将来自立していくためには、人と直接、関われる力が必要である。コミュニケーション力を伸ばしていくためには、低学年の段階から人と人が直接会って話し合いお互いを理解し合う体験を積んでいかなければならない。したがって、書き言葉のみならず、非言語である身振りや表情、絵なども含めつつ、劇やプレゼンテーション、さらには、異質の言語である外国語などを組み込む中で、コミュニケーション力の素地を築かせていきたい。

また、五感を通して感じた事実を、表現することで、体験や思考の再構築をし、認識力を高めたい。

⑥工夫してもの作りができる子

モノを作る活動は、頭で考えイメージした物に近づけるため、材料を選び、道具を用い、失敗して作り替えたり、改良したりすることで、対象への科学的な認識力が高まると同時に、手の巧緻性を高め、工夫してイメージに近づけようとする根気や、対象に対するこだわりを育てる。

それは、予想する力や、見通しを持ってものごとにかかわる力、安定した情緒の育成や、友だちとの共同の力をも育成する。

2. 生活科学習における「互いのまなざしが響き合う学習」

(1) 確かなみとりと支援

生活科の学習対象は、子どもの生活の全てであり、子どもは育った環境や性格、興味関心のちがいなどから、学習対象へのレディネスもかかわり方も、感じ方も全くちがう。

できるだけ、概念的でない「本物の体験」をさせ、対象を五感を通して、丸ごと感じさせたいと考えている。また、連続性や系統性に配慮した単元構成により、子どもたちにもテー

マ（ねらい）を意識させた学習対象へのかかわりをさせたい。そして、それぞれが感じたことを表現して、交流する。生活科では表現活動が重視されている。

確かなみとりには、子どもたちの表情やつぶやきだけでなく、伝えるために発したことばや、絵、文章の中に表された感動や願い、思いを、読み取る力が必要である。一見、否定的に見える表現であっても、その中にかくされた思いをしっかりとみとり、確かな表現力を育てていくことが、子どもたちを結び合い、子どもの世界を広げていくための支援となる。

（2）期待される学習成果

「互いのまなざしが響き合う学習」により期待される学習成果は次の3点である。

①興味関心の幅を広げる。

友だちが見つけた物や、注目した物に興味を広げたり、友だちのはたらきかけをまねしてみたりと、興味・関心の幅を広げていく。

②集団意識（協力する喜び）・コミュニケーション力を育てる。

低学年の子どもにとって、表現活動は、自己と他者とのつながりの認識や共同する喜びを育てるために欠くことができない。集団での劇や発表による表現では、自分の考えを主張したり、友だちの考えを聞いて協力したりなど、社会性を育てる機会となる。

③表現力を育てる。

そのほかにも、語彙も少なく、表現方法も限られている低学年だからこそ、友だちの表現を知ることは、友だちの感じ方のみならず、表現方法を育てる機会でもある。

3. 研究の展望

①リアルな生活と学習の結合

子どもによって興味の対象はちがう。子どもが生活の中で興味関心を持っていることを紹介し合い、みんなに広げていくような、1人の子どもの世界から出発して、みんなの世界に広げていくような単元構成をする必要がある。また、教師が意識的に子どもの世界を広げていくようなかかわりも必要だ。

そこには連続性・系統性、つまり子どもが意識の中に「テーマ」をもてるように配慮する。学習したことが現実感をともなうことが重要である。

②季節を感じる活動（季節の遊び・季節を食べる・栽培・飼育）

現代は「季節感」が感じられにくい。四季の移ろいの美しい日本をよく知るためにも、季節の年中行事や習慣、遊び、店の様子のちがい、人々の装いなどを経験・発見させたい。具体的には、栽培・飼育活動や、年中行事、季節ごとの特色ある遊びの紹介などが考えられる。

③世界を知ろう（世界の生活・人々・世界を食べる・ことば・遊び）

自己中心的なものの見方から、多様性や異質性へ目を向けるとともに、共通性にも気づき、それらを受容しコミュニケーション力の基礎を育むために世界の人々の生活や食べ物、言葉、遊びなどを実際に直接体験できるようにしたい。